

# 衝動志向性と感情

—— 発達心理学と後期フッサール現象学との接点 ——

元 明 淳

## 序

フッサールは既に『受動的綜合の分析』において、対象意味の構成に寄与する触発の成立に、単に対照や際立ち(図と地の分化)、融合といった感覚野の構造契機だけではなく、衝動や本能などの「感情的な(getühmatische)」契機も含まれるとして、いわゆる「衝動志向性」の問題圏を示唆している(XI, 150, 178)。<sup>1)</sup> そもそも、未規定な方向しか持たない盲目的な「欲求能力」とされた非志向的体験のクラス——従来、志向的体験(客観化的作用)に基づけられた二次的な非客観化的作用の一つとみなされた——が、「意味発生の遡源的露呈」の方法である発生的現象学の深化によって、顕在的(作用)志向性の発生的基盤をなす潜在的志向性の原形態、即ち衝動/本能の志向性として露呈されるに至る。もともとこの問題圏は体系化されることなく示唆に留まっており、散発的な仕方ではか呈示されなかったが、既刊著作におけるその萌芽的記述は、例えば『相互主観性の現象学』における「感情移入」論の

うちに垣間見ることが出来る。

そこで本論稿では、この衝動／本能志向の問題を、個体発生(通時的な經驗的発生)と超越論的発生(共時的、通時的な意味発生)との全き統一的具體相のもとで捉え、自我の覚醒に至る「私はできる(Teh kann)」の能力性の発見が、発生の超越論的制約に他ならぬことを論の大きな枠組みに据えたい。その意味でフッサールが「初期幼年時(Frühkindheit)の心理学」(XV.620)に言及して、個別科学の超越論的現象学への引き入れの意義を説いていたことは注目に値しよう。われわれはここでの考察を以下のように進める。まず、「本能の現象学」をフッサールの超越論的目的論の究極の課題とみなしているナミン・リーの見解を辿って、従来は不問に付されてきたフッサールにおける意識生の情動的側面の掘りおこしを概観する(Ⅰ)。次いで、就中子供の世界表象の獲得にまで至る発展段階を取り扱う「幼児期の心理学」の課題とその問題性を、フッサール自身の言葉の中を探る(Ⅱ)。さらに個別科学、ここでは現代の発達心理学の知見を援用して、彼の提出した課題の正当性を裏づけ、かつこうして経験科学の視点を採りいれたいわゆる世間的(ムンダーンな)現象学の媒介的記述が、超越論的現象学への適切な手引きを準備し、その内実を豊饒化しうることの可能性を呈示したい(Ⅲ)。

## I 本能の現象学

近年、フッサールにおける衝動／本能志向性の思想の醸成を、専らマニユスクリプトの転記手稿(Transcript)の時代的変遷を辿りながら掘りおこしているN・リーは、「メルローポントイによって妥当へともたらされた生的(vital)ないし情動的な(emotional)意義が、余りに技巧的に捨棄された」とするE・ホールレンシュタインの見解に異

を唱え、フッサールは彼の発生的現象学の徹底した深化によって、明澄な自己意識の最底層をなし高次のあらゆる志向性の発生的な基盤として、何らかの仕方では世界へと方向づけられている本能志向性を見いだすに至ったという。これは世界性の本能として、自己保存本能の裏面をなし、そしてこの原志向性が十全な意味でエゴの超越論的目的論の原成素として、単なる経験的な本能と明確に峻別される超越論的本能に他ならないとされる。<sup>40)</sup>

リーはフッサールにおける衝動／本能志向の端緒を初期の著作にまで遡り、子細に検討している。簡約して言えば、まず『論理学研究』第五研究において「欲求感覚」や「感情感覚」と称された盲目的な欲求能力は、非客観的な志向としてそれ自体は志向性をもたず、何らかの客観的表象と結びついて初めて有意味な志向として顕現するという「非客観化的志向の、客観化的志向による基づけ」のコンセプトの枠内で語られていたにすぎなかった(XIX/1,404,409d)。また『イデー』第一巻では、志向性と共に体験されてはいるが、知覚を遂行する主観としては生きていない「作用の萌」(Aktionen)の概念(III/1,263)や、『イデー』第二巻および『経験と判断』における感覚野の「押し迫り(Aufdrängen)」の現象(IV,219f, EU 80)などが、知覚の衝動性との連関で既に登場しているのは注目に値する。<sup>41)</sup>

しかし周知のごとく、人格主義的態度(自然的態度)による自然主義的態度の基づけという逆転、ひいては生活世界の現象学への転回(この動きに必然的に連動しているのが発生的現象学の深化である)にもなつて、周囲世界における諸々の対象は純粹に単なる表象的客観として把握されているのではなく、むしろ最初から価値的、実践的志向のノエマ的相関者として志向されているものとみなされてくる。そして従来、単なる欲求能力にすぎなかった非客観化的志向のみならず、外的知覚にかかわる客観化的志向さえもが、対象の諸々の規定性をより判明なものと欲する知覚への衝動によって貫かれていて、これが「ある知覚位相から常に新たな知覚位相へと恒常的に移行する衝

動力(Lee, S.88)として後期には「衝動志向性」と呼ばれるに至ったという。事実『受動的綜合の分析』では「連合の現象学」の枠内で、この知覚への衝動が「傾向(Tendenz)なきし」「狙ひ(Streben)」といった術語で提示されており、フッサールは知覚進行の無限の継続可能性を「この方向づけられてあることが傾向的に(tendenzios)あり、最初から傾向として満足への狙いとして、越え出ていかんとする(hinauswollen)こと」(XI.83)だとする。

こうした事情からして、また基づけ連関についてのフッサールの紆余曲折を経た思惟の錯綜した歩みにもかかわらず、リーは「客観的／非客観的を問わず活動的な具体的な志向は、生活世界的対象のノエシスの相關者として、価値づけのかつ実践的志向として示される」(Lee, S.143)とし、この根本特徴の発見がフッサールの後期哲学をして志向性を新たに「関心(Interesse)」として規定するきっかけとなったとみなしている。本能志向はかくして、何らかの「価値づけの志向」(XI.89)として緊張(Spannung)の弛緩(Entspannung)や、不満足(不快)から満足(快)への移行といった実践的な狙いの志向と定義されることになる(Lee, S.134)。

リーは受動的綜合の圏域における感覚野の構成および意識を介した(Bewußtseinsmäßig)刺激としての触発の統一形成(客観化的表象志向)と、非客観化的な本能志向の原触発の生起とを鋭く区別し、後者においては意識を介した刺激(例えば、顕在的な自覚された部屋の寒さ)以前にも、自我(リーの区別では先自我)は何らかの感覚を有しており(知らず知らずのうちに寒がっている)、この位相での世界の発生的原形態としての原受動的時間流における非-我的なヒュレー的あるいはノエマ的契機を、後期マニユスクリプトA VII.13, 67からとって「原ヒュレー(Urhyile)」とし、それと相關的に「意識に先行する(vorbewußt)」部屋の寒さを感じる身体運動の側面を、発生的構成の上位段階の他の動機づけられたキネステーズの諸形式と区別して「原キネステーズ(Urkinästhes)」(C11, IV.10)と呼ぶ。その際、この原ヒュレーと原キネステーズは無差別の原統一(Ureinheit)を形成する<sup>56</sup>。ただし原本能

はその対象方向においてはまだ露呈されてはおらず目標を欠き、無意識的、先意識的な仕方では世界へと方向づけられていくにすぎない。それ故、この世界への盲目的な志向的方向をフッサールは次のように表現するのである。

「開示されていない各々の原本能には、それが活動状態にあるところでは、志向的方向がある。しかしそれは全く形式づけられていない空虚地平への、また如何なる予描された既知構造をもたない目標に向かう方向である。」<sup>98)</sup>

こうした露呈されざる原本能の、無差別の全体ヒュレー(まだ、対象ないしその諸規定性の差異化されていない)への単なる盲目的な方向、根源的な世界関与をリーは自我と世界との根源的な出会い、ないし世界の第一次的な開示(ラントグレーベ)とみなす。それは「(先)自我が、自我に異他的なもののもとに感じつつ居合わせること、つまり自我の非我的なものへの根源的な感情的(Gefühlsmäßig)な関与」(Lee, S.120)に他ならない。さらに注目すべきは、フッサールはハイデッガーの『存在と時間』に先立つこと数年前に、世界地平の全体に関わり、個々の特殊本能(感情)に先行しそれらを包括し融合している普遍的、統一的な全体的感情としての「気分(Stimmung)」の概念を提出して、原受動的時間流における「原本能」と「漠とした気分」を、超越論的な「原生起(Urgeschehen)」の相互に不可分な二つの局面とみなしていたということである(Lee, S.122, 145f)。<sup>99)</sup>

以上がリーの『本能の現象学』におけるフッサールの情動的な意識生の掘りおこしの概要である。われわれは一般にフッサール現象学においては、なるほど前述のホーレンシュタインの意見に賛意を唱えて、表象的、客観的方向での考察が優位を占めるために、意識生の情動的、感情的な側面が切り捨てられてしまっているとか、同時代の科学(心理学)の諸成果には余りにも眼を塞いでいるなどの予断を抱いてしまいがちであるが、リーのこの子細な研究はこうした先入見に一石を投じたものとして非常に啓発的ではある。ただ以上のフッサールの論述を全て、超越論的な問題設定／言語の中だけで整合的に裏づけられるのかということになると少々疑問が残りはしないだろうか。

言うまでもなく現象学が事象そのものに肉迫し、現象そのものをそれが与えられる通りにありのままに記述する学問であつてみれば、単に見ること、私の明証的な直観だけではなく、経験に即した具体的な研究成果、個別科学の現象学への受容も必要不可欠な要素となるはずであろう。またフッサール自身が超越論的現象学への手引きとしての世間的(ムンダーンな)現象学と銘うった「志向的心理学」(経験的な心理学的意識を、世界という實在的な地盤を前提した上で志向的に純化した)の記述も重要であろう。そこで次に、フッサールの本能志向の一特質に焦点を当て、それと心理学的考察様式の成果との類似点ないし両者が接合する地点をめぐつて話を進めたい。

フッサールは既述したごとく、差し当り衝動/本能志向の根本的特質を緊張の弛緩(例えば痛みから逃れること Wegstreben)あるいは不満足(不快)から満足(快)への移行(例えば飢えを満たすこと)という風に定義するのだが(XIV.334)、<sup>83</sup>その他に感情触発としての「魅惑(Anziehung)と回避(Abstoßung)」という刺激の様態をも枚挙し、さらには世界の第一次的な開示にことよせて次のように述べる。

「根源的本能が奏効する(sich auswirken)ところでは、自我の単なることばに従ひ folgen と、<sup>84</sup>逆ひつち widerfolgen という防衛 Abwehr において世界の構成が本能的に生じていることが理解される」

こうした洞察を、同時代の心理学の研究成果をも加味しながら整合的に解釈しようとするラントグレーベは、キネステーズの自己運動を舵取りする動因、ないし地平意識の指示(Verweisung)仕方をフッサールの術語に倣いモナドにおける「原努力(Urstreben)」と呼び、その志向的機能を努力(狙い)の目標の充足へと向かう目的論的営為のうちに見てとる。そしてこの原努力を基本的に二つのカテゴリー、即ち「へ向かう努力(Hinstreben-zu...)」および「へから逃れる努力(Wegstreben-von...)」に分ち、各々に対応して、魅惑し、興味を惹くものとして欲せられたものへと対向すること(Zuwendung)と、厭わしいもの、脅かすものから免れること(Abwendung)という第一次

的な感覺性質を自己運動の究極的な担い手とする。そしてこの自己運動のうちで、快適である(Wohlbeinden)とか、妨害された不快さといった世界の第一次的な開示を告知する何らかの「気分」が構成されてくるとし、自己が何らかの仕方で気分づけられているこの身体的な状態感を、ハイデッガーの術語からとって「情態性(Befindlichkeit)」と名づける。以上の考えは、ラントグレーベ自身が断っているごとく、ゲシュタルト心理学者のコフカや、ムンダーンな現象学の枠内で人間学的考察を行なった精神病理学者E・シュトラウスの仕事に負うところ大である。就中シュトラウスは、感覺の存在仕方、振る舞い方を直接呈示しているこれらの表現性質を、感性的体験の初次的(primär)段階として「相貌的(physiognomisch)」性格と呼び、それを人間以外の動物の生の段階からも説きおこして、フッサールの原努力の二契機に対応する前者の「統一(Einen)」と後者の「分離(Trennen)」の両可能性が、体験する生きものの、事物や他者との共生的な(symbiotisch)理解や、究極的には世界との関与を成り立たしめているとする。認知的な(gnostisch)認識から受動的な(pat passiv)認識への感覺の存在仕方、交流仕方としての彼の理論(「感覺のスペクトル」の差異性と同一性は、感情的に「〜によって打たれてある(Getroffen-sein-durch)」というパトスの次元を際立たせたという点で、衝動志向性の問題系との親近性を表わしていると思われる。<sup>93</sup>)

心理学や生物学等の個別科学の成果を採り入れたこうした人間学的な指向は、時として実験的研究をも視野に収めつつ現象学的直観の狭い枠組みを越えて、超越論的考察への手引きを提供してくれるという意味で極めて有意義であろう。就中、後期フッサールが、後述するように人間のモナド的生のみならず、その發展形態の低次のレベルにある動物や植物、ひいては単なる事物的自然にまで各々のモナドの超越論的目的論を見てとっていたことから、人間的モナドの発生的基盤としての衝動／本能の解明には、人間とそれ以外の生きものの行動様式との比較心理学的考察は必要不可欠なのではないだろうか。

## II 衝動志向性と相互主観性

110

衝動／本能は、現象学的には、意欲作用や行為に先立つ意志の「先行形式」、「意志の受動性」のうちに存している。即ち、自我が何かに狙いを定めて(hinstreben)方向づけられ、関心づけられている初次的志向はまだ本来の行為(Tun, Handeln)や意欲ではない。それ故、志向を能力的、キネステーゼ的に現実化する道の目標と、それ以前の単なる欲求の目標、「欲求極(Begehungsziel)」とは区別される(XV.329)。この概念は既にフッサールが、『イデー』第二巻において二次的受動性(経験の習慣性、沈澱)と区別される「原感性(Ursinnlichkeit)」の次元に置いた「低次の感情の生」、「衝動の生」と呼ばれる「自然の基底」(「私の自然」)であるとか(IV.279)、さらには『危機』書で暗示的に課題として挙げられた「無意識の志向性」、即ち深層心理学の扱う「抑圧された愛や意欲消沈、ルサンチマンの感情」(VI.240)といった術語によって下絵を描かれていたものである。<sup>66)</sup>

またフッサールは『相互主観性の現象学』第三巻の付論〈衝動共同体、愛等々についての〉覚え書きにおいて、周期性を有する本能的な飢えや群居本能、食餌本能、自己保存の本能や性衝動(愛の本能)などを枚挙し、低次の衝動の生から意志の生へと、ひいては人間性における生へと至る共同体の発展過程のもつ課題性格を、衝動／本能の概念を軸に示唆的に叙述していた(XV.597f)。もちろんこの衝動／本能は、差し当り「外的に特徴づけられうる事実に対する名称である」が、しかしそれはあくまで内側から超越論的発生の相において考察されねばならないことは言うまでもない。そこでこれらの概念をフッサール現象学の根本概念である「志向性」の定義から見ると、衝動／本能、ないし感情的な契機は、盲目的な、目標表象を欠いた空虚地平——これは、まだ露呈されざる本能的なものとして、何らかのドクサ的定立を前提する空虚表象の地平とは厳密に区別されるが(XIV.335)——ないし



「空虚に本能的な予感」(XIV 333)などと呼ばれ、現前化意識をまだ伴わない表象化以前の空虚な志向とみなされる。

「まだ露呈されていない狙い(Streben)の志向(衝動志向)には、想起やそれと親近関係にある現前化の可能性や、自由な私はできる、や私は意志する(現前化やこれを普く貫いて導かれる実践的な現実化へと向けられた)は、まだ属していないのである。」(XIV 335)

もつとも、この非表象的な衝動志向と言えども充実を求める志向には変わりなく、その意味でそれは何らかの方向、未規定的な方向を有する目的論的な狙いの志向なのである。この空虚意識は満たさるべき空虚として、フツサルがその当初から地平意識の根本特性とみなした「未規定的な規定可能性」を具備しているということができ。さて、以下での衝動／本能の次元をわれわれは、先自我(Souls), 就中子供が本来有している生得的な地平と捉え、内容が規定されていないから空虚ではあるが、人間のもっている何らかの固有性が発現してくる素地のようなものとして把握したい。そしてこの生得的原本能の地平のうちに既に、段階的な、より高次の充実への目的論的な歩みが刻印されているものとみなす。つまり、子供の超越論的誕生(究極的には母体内の)における最初のヒューレーの充実(部分)と共に、生得的原本能の地平(全体)が未規定ながらも世界へと向けられた本能としてその発展の下地を既に自らのうちに孕んでいると言えるだろう。それ故、この生得的原本能は「全ての発展を本質一般的に規定している原初的な原衝動、原触発」<sup>10)</sup>として、世界の構成に必要な不可欠なエゴの超越論的な目的論的根拠とみなされる。そこで差し当り、衝動／本能の次元を議論の骨組みとしてこのように暫定的に規定しておいて、(Ⅲ)ではその具体的な奏効の場面を、就中子供の心的生の超越論的発生の分析と連関させて考察していきたい。その前に、差し当り相互主観性論における幼児期の発生的分析の意義について述べておく必要があるだろう。

フッサールは『相互主観性の現象学』第二巻の中で、『デカルト的省察』第五省察と目される他者認識の理論を反芻し、かの感情移入の問題を虚構的(Einbildung)発生の問題だとして自己弁明を行なっている。周知のごとく、そこでは既に構成済みの周囲世界、および発展した主観性における「第一次性(Primordiales)」の領域内に現われる「私の」身体物体と、「他の」身体物体との類比関係から他者経験の発生を説くという段取りで考察がなされた。しかしこうした感情移入論が、あくまで静態的現象学の枠内における所与の他者統覚の志向的解明に留まっていることは、数多の論者のこぞって指摘するところである。

「他者の付帯現示の発生が、他の主観性なしの周囲世界の先行する発生を前提しているとか、あるいは既にこのような周囲世界が構成されているなどということ、予め私は前提することはできない。」(XIV.477)

つまり、周囲世界の構成には既に他者の側からの構成、共構成(Mitkonstitution)が働いているのであって、言わば自我と世界と他者は三位一体となつて同時的に構成されてくるというのが、発生的現象学における相互主観性論の首尾一貫した帰結に他ならない。こうした不備を自覚しているフッサールは、発育、成長した人間の正常性(Normalität)に対比して、その異常性(Anormalität)をも考察へ引き入れることを頻りに力説し、後期哲学において、それなりの仕方では周囲世界を自らの周りに企投しようとするような存在者、例えば人間の子供、狂人(精神病者)、ひいては動物にまでも何らかの超越論的主観性を帰属せしめ(XV.177, VI.191) 就中、発生的連関における子供の発展過程の現象学的分析の必要性を説いている。

「子供の発展(成長)、場合によっては成長する子供に感情移入さるべき最初の世界統覚の発展の問題は、一個の解明すべき問題である。」(XIV.477) またフッサールは、最初の感情移入や身体的表出の契機のみならず、それぞれの子供の発展の位相に身体や心の物理組織的な発展の如何なる類型が帰属しようかといった研究課題をも挙げ、

他者構成の理論の完全な仕上げはこの「幼児期の心理学」の遂行なしには不可能であることを示唆している(XV.141f)。「周知のとく、こうした分析の発展的方向性を継承したものとしては、例えばH・ワロンの発達心理学の知見を援用し、独自の相互主観性論を展開したメルロ・ポンティの講義録「幼児の対人関係」(「眼と精神」所収)が著明であるが、以下ではあくまでフッサールの幼児期の心理学の課題性格と、それが現代の心理学と如何に切り結び合うのかという観点を、衝動／本能志向性の問題と絡めて見ていくことになる。」

「より初次的な発生においては、人間としての子供(Menschenkindheit)に先立つ一切のものは、依然として問われないままである。」(XV.616) それ故、生まれた子供に先立つ、まだ生まれていない子供、彼の生殖点(Zeugungspunkt)に至るまでの心的発生、つまり胎児の段階までもが斟酌の対象となる。その意味でフッサールは、初期幼年時にもさらに先行する「懐妊(Schwangerschaft)の生理学」(XV.597)の課題についても触れ、自らの超越論的、現象学的研究にとっての必要不可欠な要素とみなすのである。

既にラントグレーベが現象学とヘーゲル哲学との対峙において明らかにしているように<sup>18</sup>、あらゆる思惟や表象の根底に、即ち概念の自己展開による運動の發生的基盤に、幼児期の前言語的レベルの層における身体的、感性的なキネステーズに基づく自己覚知が存しており、この自己運動の意識が人間としての人間性の誕生に至った自我形成の端緒において、練習を通じて周囲世界を意のままにしうることを覚えこまれた能力意識に他ならず、本来「私は為す(Teh tue)は私はできる(Teh kann)に先行している」として、この次元を発生の超越論的制約とみなしたことは正鵠を射ている。したがって、超越論的発生の全き理論を構築するためには、「原子供(Ur-kind)」の發生的な考察は不可避のものとなるだろう。故にフッサールは、「初期幼年時の心理学」の課題を示唆した当該箇所で繰り返し次のように問うのである。

「私は自分に妥当する世界を相關的に解釈しつつ、赤ん坊(Wickelkind)を彼の内的生の内で理解せしめ、彼が『世界表象』を自らに獲得するまでの彼の成長を理解せしめる課題を持つことにはならないか。」(XV:620)

もちろん自我のまだ未成熟な段階での自己理解は不完全であるが故に、ここには何らかの方法的な媒介的操作が施されねばならない。即ち、私は自分の本当の幼年期の状態を知ることができないから、成熟した今、知つてゐる(知り得る)子供の在り方から類比的に自分の幼年時代を想いおこすのである。直接的、原本的、現在のではないが、幼児の種々様々な身体的表明、例えば笑い、叫び、振る舞い等において共主観(私という観察者)が何らかの間接的な現前化的体験、一種の感情移入を行い、それによつて彼ら(幼児)と私の幼年期の意識形態とを架橋し、私の純粹な心的内面性における準「経験」を獲得できるといふわけである。もつともこの心理学的な意識形態は、普遍的・超越論的還元によつて超越論的・現象学的に純化されねばならないことは言うまでもない。フッサールはこの必然性について以下のように語る。

「ところで私が、私の人間的存在が、成人に至るまでの幼児の發展の全段階を伴つた私の統覚的形成物であるなら……このことは、超越論的・現象学的な態度および方法へと私を強いる。そこにおいて私の心的内在は超越論的な内在へと、しかも心的に内在的な流れゆく私の現在は、私の絶対的、超越論的な現在へと変ぜられる。私の内的な心的發展にとつても事情は同様である。即ち、私の超越論的な現在のうちには私の超越論的過去、およびその都度相關的に構成された私の『世界』を伴う、私の超越論的な『子供』の存在の全段階が含まれている。」(XV:583)

この節での論点を要約しよう。全き相互主観性論の構築のためには、既に発育した主観生の発生的基盤をなす幼児期の心的發展の分析が是非とも必要不可欠である。そのためには超越論的現象学と、経験科学ここでは就中、経験的心理学(発達心理学)との積極的な対話の必然性が生じることにならう。リーはこの点で、フッサールはこの事

態を方法論的観点において他の如何なる現象学者達よりも根本的に追思惟したということの評価し、個別科学の諸成果の現象学への受容が後期フッサール哲学の重要なテーマだったとみなしている。もちろん「幼児期の心理学」の具体的分析とその現象学的な仕上げは行なわれずに留まり、全てが問題提示的な示唆に終わっているとはしても、その課題性格だけは今後受け継ぐべき導きの糸として残り続けることになるであろう。では次に、こうしたフッサールの考えの根拠を発達心理学の知見等を援用しながら具体的に検証し、それを通じて現象学と経験科学、およびその媒介項をなす志向的心理学(ムンダーン現象学)との緊張関係の一面を呈示することで、今後のあり得べき現象学の方角性を考えてみたい。「この志向的心理学における記述の場面を以下では、フッサールのムンダーンな子供の分析の位相のみならず、現代心理学のデータを現象学的に取り上げ直す局面と解して頂きたい。」

### Ⅲ 発達心理学と発生的現象学

今までの論述(前半)は衝動/本能志向性の一般的特質、就中既に展開した(enticated)主観性の「習性的統覚体系のその都度の奏効のプロセス」、即ち目覚めたモノダの言わば共時的な超越論的発生の分析であつたが、次に通時的な視点における形成された世界表象に先立つ発生的な先行段階、つまり眠れるモノダ(ここでは子供)の「遠い過去地平における習性的統覚体系そのものの形成のプロセス」を分析の俎上にのせ、子供の心的発展、その自我形成に焦点を当てて、自我と他我との相互の絡み合いや分化に、衝動/本能志向がどのように関与しているのかについて議論を進めよう。

フッサールは衝動志向性の働く現場を、自我未分化な相互主観性の原形態、即ち「充実の絡み合いによって形成

される二つの第一次性(Primordialitäten)の統一」(XV:594)とみなし、特に母親—子供関係を例に挙げて次のように述べている。

「第一次性は衝動体系(Triebsystem)である。それが本源的に立ち留まりつつ流れること(urtümlich stehendes Strömen)として理解されるなら、そこには他の流れへと、場合によっては他の自我主観と共に何かを目指し(狙う)つつ向かう hineinströbend 衝動が存する。」(XV:594)

この第一次性の概念は周知のごとく『デカルト的省察』第五省察において、他者に関わる志向性を全て排除した後獲得される純粹な私の「固有領域(Eigensphäre)」を指し、まずこの領域に与えられる自然物体としての他者の身体と私の身体との対化(Parung)的連合によって、他者の心的生を内感投入(感情移入)するという他我構成の脈絡のなかで展開された。こうした静態的な自他の発生の理論を越えて『相互主観性の現象学』では、能動的な感情移入に先立つ幼児期のある段階で、自他未分化な第一次性の領域において、自我形成以前の言わば匿名的、受動的な感情移入といったごときものが常に既に働きだしており、これが展開した主観性(意識)の高次の作用を成り立たしめている超越論的制約としての衝動志向性——まだ自我中心をもたず、盲目的な仕方では異他的なものへと向かう漠とした衝動——とみなされているようである。元来、私に固有なことを言い表わす第一次性の概念は、発生的には自他の絡み合う衝動志向の体系の生成しつつある現場を意味する概念へと変容している。即ちこの第一次性の領域には、他者(Anderer)が自我を欠いた最も受動性の段階で既に含まれているというわけである。

「自我として、人格としての私の存在は、私の第一次的な生成に基づく存在であるだけでなく、他者の生成との相互交流的な絡み合いに基づく存在でもある。」(XV:603)

そこでわれわれは以下で、能動的相互主観性(感情移入)の発生的原形態としての受動的相互主観性(感情移入)の

レベルを、母—子間の情動的交流、その「本能的コミュニケーション」(XV.609)のうちに求め、フッサールの発生の現象学的記述を他の経験科学、就中現代の発達心理学の研究成果と比較考量しながら、その妥当性を吟味することにしたい。

フッサールは「原子供」における(先)自我の最も早い発生的原形態を、母体内の子供のうちに見てとり以下のように述べる。

「母の胎内における(mutterleiblich)子供は既にキネステーズを有し、キネステーズ的に彼の『物(Dinge)』を動かしているのである——既に第一次性が、原段階において形成されつつある。」(XV.604)

例えばこの時期、胎児はやがて生まれ出てくる時のために母親の羊水を飲みながら、もぐもぐと呼吸の練習をしているとされる。また外界の音を聞き分けるだけの能力やある程度の記憶力も有しているという。発達心理学者のH・ワロンは、人格の発達をその環境との関係から始めて、彼のもつ生活手段と結びつけて考察する必要性を説き、子供の最初の生、胎児期の生に遡ることの意義について触れている。そしてこの時期にも既に、子供には何らかの心性が宿っているものとみなし、この段階を母子間の「生理的共生(symbiose)」と呼んでいる。もちろん子供は全て母体から栄養や血液、ないしホルモンの一部を享受するという依存態勢が主ではあるが、既に自己の身体の諸器官をできあがった構造のレベルに應じて運動させることもできる。「この時期においても子どもは外からの印象によつて一定の姿勢反射をひきおこすわけで、この印象が子どもの神経系を通じていくことは確かである」<sup>19</sup>

リーはこうした事態を現象学的に次のように記述する。彼は、目覚めつつある生得的原本能の全体性のノエマ的相関者としての母体を、先—自我の始元的世界、即ち自己保存の領野あるいは「活動」の領野と定義し、この原始元において既に先—自我の根源的な「運動形態」が観察されうるとして、上述の母体内のキネステーズを、胎児が

手足を動かしたり、あがいたりするという意味のあらゆる人間的実践の発生的な原形式として呈示される母体内の「もがきのキネステーズ(Strampelkinasthese)」(Lee, S.194)と呼んでいる。

「母のなかの子供——即ちわれわれは感情移入には基づかない第一次性の相互的な絡み合い(Ineinander)を有するのではないか。」<sup>201</sup>

自我意識の最低層を告知するこの原キネステーズの位相は、まさに世界(この場合は母親)へと向かう衝動志向の発生的な原形態として、発達心理学的にも確証されうる自我生の発生の超越論的制約である。

さて、子供は母体から産み落とされた新生児の段階でも、まだなお外界に対しては身体の快、不快に専ら制約された衝動的、情緒的な振る舞いしかなさず、勝義の第一次性における物体的統一としての事物や差異化された個々のキネステーズによる運動器官の構成にはまだ早すぎず、衝動志向と結びついた全体キネステーズ的経過としての他者との「情緒的共生」の段階に留まっている。この時期の對他関係における幼児の特異性を、岡本夏木氏は新生児の共鳴動作や同期行動の例を引き合いに出して述べている。<sup>202</sup>就中後者の同期行動について、あるアメリカ人の(生後十二時間の)新生児に英語と中国語のスピーチ、母音の連続、規則的な打叩音をテープに吹きこんで聞かせたところ、後者の機械的、物理的な音よりも、前者のスピーチのもつ各音節に極めてよく同調したりリズムで身体を動かすことが発見されたという(有名なコンドンとサンダーの実験)。これは生の声を直接語りかけても同じことであり、このことから何語であれ新生児は、人の声に身体をよく同調させることがわかったのである。「もつとも人の声でも相対的なものであって、母親の声が他人の声よりも同期行動を惹きおこしやすいということもある。」即ち幼児は對他関係、就中母親との関係のなかで生きていくのにふさわしいコミュニケーション行動のメカニズムを既に生得的に持ちあわせていること、これを現象学的に言えば、世界ないし他者へと向かう何らかの衝動/本能志向



をまだ分節化されていない仕方ではあるが生得的に有しているということが出来るだろう。またこの生得的地平のみならず、フツサルは新生児は既に、高次の段階の経験的自我として母体にいたときからの経験の獲得物、相続遺産(Erbmasse)を有している(XV.605)と言っているが、これも異他的なものへと向かう空虚な地平として、以後の発展の階梯における他者との緊密な志向的な絡み合い(志向の充実)の下絵を予め描いていると言えるのではないか。

岡本氏はさらに母子関係における「目と目の絆」を強調して、皮膚感覚における赤ん坊と母の乳首との触れあいだけではなく、いちばん気持ちのいい状況において、その胸と口のすぐ上で起こっている目と目のコミュニケーション——例えば母親がじつと赤ん坊を凝視し、彼の視線を自分に向けさせるなどして彼の関心を惹き、逆に赤ん坊の方も母親の目をうるおいのある眼差しで見返すといった事象——を例に挙げ、それが「情動の共有」や「雰囲気(場の共有)」の生成の核になっていると説く。ここには衝動志向から、それを基盤とした社会的・文化的な制度の刻印づけを促す、人間に特有の構造が見られる。

フツサルも、これと同様の分析をしている。「視覚的、および触覚的統一としての母親——ある種の主だった外観(Hauptansichten)へと関係づけられた『感性的像の変転』(XV.605)について触れ、赤ん坊が母親の懷に抱かれて乳を吸いつつ彼女の目を見ているときの単なる欲求の対象としての母親像が、情動を喚起する、彼の欲求を満足させてくれるヒュレーの感情要因として働きだしていることを指摘している。まさにこの感性的像はリーの分析でも見たように、原ヒュレー(キネステーズ的に動機づけられていない統一)として赤ん坊のキネステーズと根源的に統一されており、このキネステーズが衝動志向性の奏効の場である受動的な原キネステーズに他ならないと言えよう。岡本氏はこの「目と目の絆」が基礎となつて、微笑反応や他の共鳴動作(例えば口の開閉の模倣等)の交わし

合いへと展開されていくとし、自他の共生、コミュニケーション行動の出発を、間主観的と呼ばれるこうした共同体的情動の基盤として捉えようとするのである。

「成人の伝達、交渉(Verkehr)は、成人以前の伝達や相互交渉の形成——母と子の間の——を前提している。根源的に本能的に形成される結合…。」(XV:582)

さて次に生後五、六カ月を過ぎる頃の感覚運動段階の初期に見られる幼児の発声練習についてフッサールの分析を検討してみる。「ちなみにフッサールは既に『イデー』第二巻において、発声のもつ働きが幼児の身体構成に際して特記づけられた役割を果たすことを示唆していた」<sup>23</sup>彼は、母親からの音声を周囲世界の指示対象への記号として理解するための前段階について以下のように述べる。

「子供は不随意(unwillkürlich)のキネステーズを通じて知らず知らずのうちに音声を発し、それを繰り返し、同じ音声を意図的に産出する。そしてその音声を繰り返そうとする意志と、それを任意に産出することを学ぶ。その音声には能力的なキネステーズが属している。しかし母親は彼女なりに、子供のまねをしながら似たような音声を発す。子供はそれを聞き、所持するが、彼自身に属するキネステーズ、つまり連想的に覚起されていて(自分の発した声を、自分の声だと類推的に統覚する)、しかし(母の声を聞くこと)一緒に共存していないようなキネステーズが欠けている。その代わりに今度は、そこからして(何か)産出され始めるような零のキネステーズ(Mulkinasthes)が働きます。子供は母親と同様、自分自身でこれを繰り返す——この事態はどのような役割を果たしているのか。」(XV:606、括弧内引用者補足)

前半の文言は山口一郎氏も指摘しているように、<sup>24</sup>受動的な(本能的)キネステーズから能動的キネステーズへの漸次的移行を表わしているが、後半はこの移行過程に母親が介入してきたときの、諸キネステーズ間の連合の形成と

分化が叙述されている点で注目<sup>90</sup>に値する。まず前半の要件についてだが、感覚運動期のはしりに見られる行動で、自分の活動の効果を反復しようとする行為は発達心理学では「循環反応」(運動⇄感覚)と呼ばれ、子供は自分の運動に伴って生じた結果の感覚が興味や快を催したとき、もう一度先の動作を繰り返そうとするという。この点に關しては、驚くべきことにフツサールも類似の発言をしている。

「身体を動かすことの喜びが、手足を動かすことのみならず、またこの動きを支配できるようになるまでの時期に見られる。それは、のちに自由に支配できるようなキネステーズ的体系の形成をも意味している。」<sup>91</sup>

一方後半の文言を裏返して言いかえるならば、幼児はまだ、自分の発した声<sup>92</sup>が自分の声だと覚起されず、自分のと類似した母の声と一緒に共存しているという自他未分化な段階に留まっている。即ち発声練習の初期には、自分の調音器官(声帯筋)と聴覚のキネステーズとが連想的に結合されておらず、幼児には自分の声と母親の声とが渾然一体となつて聞こえているのである。発達心理学ではこの反復囁語は、不快なときの泣き声とは異なり、その発声<sup>93</sup>が何らかの快と結びついたときに、それが母親のもたらす快音を媒介したものであれ、自分一人でやる喜びの表出<sup>94</sup>であれ、調音や発声をさまざまに変化させながらそれを自分で聞き反復していく過程で、言語習得の前段階が次第に準備されていき、それが固有な身体の独立化へと寄与するという役割を担っている。零のキネステーズは、周囲世界のパースペクティブ化が行なわれる自我の身体化が始まったことを意味する。発声<sup>95</sup>がもともと系統発生的には、循環系の呼吸器に遡源する内受容系の活動とされ、これが自己受容系において声となり、これが外知覚(聴覚)と内的に結びつくことからすれば、発声は自己の身体構成(「私の身体」の構成)に際して特記づけられた機能<sup>96</sup>を有すると言えよう。

最後の一例。周知のごとく衝動的運動性の段階(ワロン)では、対物/対人認識の双方において幼児には、対象の

物理的、客観的規定性が与えられる以前に、まず対象のもつ情動的性質が決定的な影響を与えることが多くの論者によって指摘されている(岡本・浜田・増山等)。<sup>5)</sup>

「外界の事物は最初子供にとつて、独立した対象物として在るのではなく、主として情動的な感受性に訴えてくる自分と一体化し融合した性質を強くもっている。子供は、それに対して接近しようとしたり、立ち向かつてゆこうとする。また、身を退けたり、姿勢をかえたりする反応や、快、不快等の感情から出発し、やがて愛情や不安、喜びや苦痛などにいたる、ニュアンスの多様に分化した反応までもひきおこすようになっていく」<sup>6)</sup>

感覚運動期の段階(生後一年前後)に至つて漸く、幼児は事物の性質を手や口等の運動器官を使って様々な仕方であらめ(行動物の段階)、次いで情動の表出を一端内面化して行動の非主題となし、遂には事物を自己の感受性と切り離して「静観対象」として捉えられるようになる。もつとも情動喚起体としての対象の性質は、次の感覚運動的性質の登場を俟つて終わりを告げるのではなく、後者は前者を含みつつ重なり合つて成層構造をなしている。こうした意識構造の重畳態は、その發展形態として成人の意識を準備するものであろうし、(I)で見たようにわれわれの意識は、発生的には感性的経験の初次的段階をなす衝動志向性をその内に沈澱させていることを裏づけていると言えらるだろう。

さらにこれと関連して相互主観性論にとつて意義のあるのは次の点である。幼児が情動をコントロールしたり、事物を把握するにはその初期から、彼の情動的相貌の知覚に深く関与する「他者」の存在が必要不可欠であり、ワロンによれば外界への適応がまだ無力な衝動的運動性の段階では、就中自分に出来ないことを他者(例えば母親の助力を俟つて実現する(不快や苦痛の解消)という自—他の依存関係が重要な役割を果たすとされ、他者を媒介とした情動や姿勢(ワロンの言う自己)受容感覚が担う)こそが表象の起源となり、自—他の分化を促すモチーフになると

いう。即ち幼児は「自己の感受性の内部に他者性(alterite)を認識していく」というわけである。

対物認識においても、まだ本来の意味での対象の所有ではないが、例えば母親―物―新生児という三項関係において、同一のテーマの共有、即ち母の向けた関心の方向(バラの花)に彼自身も視線を合わそうとする指向の共有、前述した「情動の共有」といった事態が垣間見られるという。これは現象学的に見れば、自我―周囲世界―他者が、相互主観性の発生的な原形態としては三位一体となって同時に構成されてくることを証していよう。

「キネステーゼ的なヒュレーが単なる進行ではなく、衝動的経過である」とするフッサールの主張は、ここで挙げた幼児期の分析によっても十分確証されうるのであり、彼自身も上に挙げた諸例以外に草稿群のなかで幼児の様々な情動的、本能的反応を引き合いに出して記述している。それ故、相互主観性の発生的原形態としての、幼児期の衝動／本能志向性についてのフッサールの断片的な観察記述は、超越論的現象学への適切な手引きを準備する必須の課題として、示唆的にはあるが、充分視野に収められていたと言わねばならない。ただそれらの論述の妥当性と射程は現象学的直観の内部に留まらず、経験科学のデータ等と比較対照してみることで検討、吟味される必要があったのであり、フッサールの「志向的心理学」の意義もその点にこそ存するのではないだろうか。

## 結 語

これまで見てきたようにフッサールは、正常性のあらゆる段階や境界設定はその統覚の意味を異常性のうちに有しているとして、むしろ後者から前者への逆照射によってこそ人間の全体的な把握に至りうるのでと考えていたように思われる。本稿では衝動／本能志向はこの異常性の一事例として、成育(発展)した自我の発生の超越論的制約

をなす子供の心的生に予め備わった、世界へと向かう目的論的な志向性の原形態とみなされた。就中、子供の先-自我の位相では(Ⅲ)で見たごとく、他者との共同化へと宿命づけられた何らかの志向として——「相互主観的本能」(IX.486)ないし「社会的本能」——として既に働きだしていることが確認された。それ故に、「個々の自我の構成的な経過は、あらゆる発展位相において最初から相互主観的出来事なのである」(I.e. S.200)。その際この事態を個体発生的に確証する経験理論を、われわれは母子間の言わば「情動の場」の生成のうちに求めた。この概念を明示化した増山眞緒子氏は、中沢和子氏の観察事例を引いて、子供が道具の使用を覚える時、例えば両親が用いている歯ブラシを何かいいものとして、道具の適所全体性をまだ未規定的な仕方で告知する何らかの「気分」において把握するものとみなし、道具使用を第一次的には欲求体系の場と捉え、道具の意味の習得はあとから行なわれるとしている。こうした「情動の場」理論は、従来の知・情・意の分化以前の、または三者もろともカオス的に孕んだ自-他共軌の発生的な現相場として「共同主観性/間主体性」論の核心に据えられる。そして彼女もまた経験心理学の理論をふんだんに援用して、相互主観性の発生的機序を哲学的に基礎づけようとしている。われわれの衝動志向性についての議論も、フッサールの立論を個別科学の成果に照らし合わせて編成しなおすことによつて、その正当性を吟味することにあつたことを鑑みれば、その点で両者の方途は軌を一にしていると言える。

このように衝動/本能志向の問題系は後期フッサール現象学において、考察の矛先を既に展開した主観性に先行する眠れるモナドの「沈澱した生」、「隠された歴史」の露呈に向かわせ、さらには人間のみならずあらゆる生命体(自然自体、無機的自然をも含む)を包括する超越論的モナドロジとしてアリストテレスやライプニッツを継承する企てとして構想されるに至る。ここで特記すべきは、各モナドの発展の階層論を導入することによつて、個体発生、ならびに系統発生の両面からモナド全体の超越論的目的論を完遂することである。それは同時に、われわれ哲

学を営む学的生をも突き動かしている衝動力を「普遍的本能」とみなす歴史の普遍的目的論の実現でもある。ただし本稿の課題は衝動／本能志向の暫定的な特性づけを試みることで、それと経験科学、およびその成果を志向的に純化した世間的（ムンダーンな）現象学とを対質させ、超越論的現象学への適切な手引きを調達することにあつたのであり、就中、発生論的視点を考慮に入れる現象学と発達心理学との間には、方法論的意義からして顕著な親近性があることを繰り返し強調して本稿を締め括りたい。

## 註

- (1) 以下、フッサールの既刊著作における引用（参照箇所）のローマ数字は全て『フッサール著作集（*Husserliana*）』の巻数を表わし、ページ数をアラビア数字で示す。
- (2) Lee, Nam-In., *Edmund Husserls Phänomenologie der Instinkte*, Kluwer 1993. in: *Phaenomenologica*. Bd.128. 以下、リーの著作からの引用は直接本文中に記載する。
- (3) Holenstein, E., *Phänomenologie der Assoziation*, 1972. in: *Phaenomenologica*. Bd.44, S.37, Ann.15.
- (4) Husserl, E., *Transcr. EIII9*, 6. zitiert nach Lee, S.139. 以下、フッサールのトランスクリプトからの引用（参照箇所）は主として前述のリーの著作に基づく。
- (5) 「対象が、主観へと押し迫ってくる。そして主観へと（理論的、美的、実践的な）刺激を及ぼす。対象は対向（*Zuwendung*）の対象となり、特有の意味で意識の門をノックする。対象は引きつけ、主観は引きつけられる。そして遂には客観は注目されたものとなる。」（IV.219f）
- (6) この事態を現象学的・人間学的に記述したものととして、以下の文言を挙げておく。「知らず知らずのうちに震えてしまうことがすでに、『私は寒い』という言葉で言い表わされる冷却の意味に対する動機づけられた反応なのである。例えば筋緊張を増強し、身体を震わせ、あるいは身体を縮こめて体表面積を縮小し…。」ボイテンディク『人間と動物』濱中淑彦訳、み

すず書房 五三頁参照。

- (7) 原キネスナーゼ、原ヒュレーの概念については、例えば以下のページに見られる。Vgl. XV 385.  
 Husserl, E., *Transcr. EIII9, 22, zitiert nach Lee, S.119.*
- (8) ただし、フッサールとハイデッカーにおける「気分」概念の一方に対する他方の先行性や両者の親近性がここで問題となつてゐるのではなく、あくまでフッサールの思惟のプロセスにおける内的論理学が重視されるべきだとリーは言う(Lee, S.145)。
- (10) 感覚与件が既に最初から(例えば新生児の段階で)射影(Abschattungen)の機能をもっているか、事物は地平的に把握されているかという点に関して、フッサール自身が先天的盲人は開眼手術後に完全な視覚野を手に入れるのに困難を余儀なくされると述へ(XIV.333)、「帰納的なものも決して無視されないとして個別科学の成果に訴えているようである。これはおそらくゼンテンの当時の『先天性盲人の手術後の空間および形態把握』(二三三)への言及であらうと思われる(Vgl., Lee, S.159)。  
 Vgl., Yamaguchi, I., *Passive Synthesis und Intersubjektivität bei Husserl, in: Phaenomenologica, Bd.86, S.115.*
- (11) Husserl, E., *Transcr. BIII9, 70, zitiert nach Lee, S.105.*
- (12) Husserl, E., *Transcr. BIII9, 12, zitiert nach Lee, S.120.*
- (13) Landgrebe, I., *Phänomenologische Analyse und Dialektik, in: Phänomenologische Forschungen Bd.10, S.78f.*
- (14) Vgl., Straus, E., *Vom Sinn der Sinne, Berlin Göttingen Heidelberg? 1956, S.207, 394etc.*
- (16) 筆者は以前にシユトラウスの感覚論については、その詳細を述べておいた。
- (15) 拙稿「E・シユトラウスの現象学―感覚作用の交流仕方について」(関西大学哲学会『哲学』第十七号平成九年参照)。  
 類似の方向で独自の現象学的身体(感覚)論を構築しているH・シユミッツは、「情動に襲われている(atlektives Betroffensein)」人間の生の在り方を深く別抉し、例えば従来からの「不安」についての現象学的定義は何も明らかにしていないに等しいとして、主観―客観分裂以前の感情的な「間」の次元を身体の「揺動(Reagen)」や「雰囲気、あるいは天候(Wetter)」との類比などから子細かつ緻密に記述している。ヘルマン・シユミッツ『身体と感情の現象学』小川 侃編(産業図書第二章「不安―雰囲気と身体の状態感」九五頁以下参照)。
- (16) ちなみに後者はまさにフロイトの精神分析の意図と重なるものであり、例えばこの点に関してポイテンディクは、フッサール現象学の深い意義を広範に普及した心理分析の方法論への適用にあるとし、それは「深層心理学の領域では：デカ



- ルト主義からの解放において、志向的意識と無意識の志向性の表明的な分析論、および具体的な人間の現存在様式における志向と意味構造の包括的な認識において示される」とみなしている。
- Byrندیk, F. J. J., *Die Bedeutung der Phänomenologie Husserls für die Psychologie der Gegenwart*, in: *Husserl und das Denken der Neuzeit*, in: *Phänomenologica*, Bd.2, S.95.
- (17) Husserl, E., *Transcr. EIII9*, 4, 1933, zitiert nach Lee, S.168.
- (18) Landgrebe, L. ebd., S.71ff.
- (19) Landgrebe, L., *Das Problem der Teleologie und der Letztlichkeit in der Phänomenologie und Marxismus*, in: *Phänomenologie und Marxismus 1 Konzept und Methoden*, S.80f.
- またランググレーベは感性的な音声の分節化(耳との結合)が、言語の成立のための最低層の超越論的制約であるとして「私はである」の主要な契機とみている。
- 浜田寿美男『フロン／身体・自我・社会』(ミネルバ書房)、第一部・3「子どもにおける社会性の発達段階」七六頁以下参照。
- (20) Husserl, E., *Transcr. D14*, 7, zitiert nach Lee, S.199.
- (21) 岡本夏木『子どもとつとむ』(岩波新書)「一二頁以下参照」。
- ちなみに最近の乳幼児の研究によれば、子供は母体内での段階から既にある程度の記憶を有しており、よく聞かされた母国語と単なる異国語とは、出生後各々の言語に対して前者では激しく身体を動かして反応し、後者ではほとんど無反応であることが知られている。また子供に対する父親の果たす役割もクローズ・アップされつつあり、例えばこわい絵本を読んで聞かせて、子供の熱中度を喚起するためには母親(やさしい絵本に適する)よりも父親の方が向いているとされ、子供の運動性相貌に寄与する両親の役割の独自性が注目されてきている。
- 岡本 前掲書、五二頁以下参照。
- (22) 私の観察によれば、子供においては自分自身が発する声と、それに加えて類推的に聞かれる声とがまず自我の客観化もしくは「他我」の形成のための橋渡しの役を演じるように思える。その後やっと子供は自分の視覚的な身体と「他者」のそれとの感性的な類比を知りうるのである。ましてや他者に触覚的な身体と意志的な身体とを付与しうるのである。」(IV, 95)

- (24) Yamaguchi, I. ebd., S.116.
- (25) 村田純一氏は、幼児の模倣や微笑みの交わり合いといった現象の基盤に、大人(母親)の方も子供を模倣し、子供の態度をとることによる相補性の関係を見てとり、これが「働きかけ、働きかけられる」主体の成立に必要な契機とみなしている。こうした方向での詳論は、本稿では割愛せざるを得ない。
- (26) 村田純一「人称の成立―子供における相互主観性の成立」(新岩波講座『哲学』四 世界と意味)八二頁以下参照。
- (27) Husserl, E., Transcr. C16IV, Bl.13, zitiert nach Yamaguchi, I. ebd., S.117.
- (28) 浜田寿美男 前掲書、または同氏の『「アジェとワロン」(ミネルバ書房)参照。
- (29) 廣松 渉・増山真緒子共著『共同主観性の現象学』(世界書院)、第一部「共同主観性の発生的機序」参照。
- (30) 岡本 前掲書、一一五頁。
- (31) 浜田 前掲書、第一部・1「自我の水準とその変動」一七頁。
- (32) Husserl, E., Transcr. C16IV, Bl.13, zitiert nach Yamaguchi, I. ebd., S.117.